

---

# 雪 ～コナン哀ものがたり・番外編3～

サブラピッド

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

雪 ～コナン哀ものがたり・番外編3～

### 【Nコード】

N7216C

### 【作者名】

サブラピッド

### 【あらすじ】

阿笠邸での少年探偵団のクリスマスパーティーで、ちょっとした騒ぎが起こります。コナンと哀が姿を消したことに気づいた歩美、光彦、元太は・・・

(前書き)

ラブラブなコ哀です。苦手な方は、ご遠慮ください。少年探偵団と阿笠博士が少し登場。

賑やかな声が阿笠邸に響いている。12月半ばのこの日、コナンと哀、光彦に元太、歩美といつもの少年探偵団のメンバーがクリスマスパーティーをしていた。主催は、家主の阿笠だが、料理やプレゼントの用意などは、哀と歩美の指導のもと、子供たちがやっていた。

いつものように、賑やかに騒いでいる3人を見守るようなコナンと哀。この年、もう小学6年生になっている。

他の3人も、体も、心も随分成長している。そして、コナンと哀の仲を冷やかしたりすることも多くなり、実際の年齢では、10歳も上のはずの2人でも、時々、顔を赤くさせることも多くなっていた。

「あっ！雪だ！」

歩美の声にみんながリビングの大きな窓を見る。すでに、時刻は夜6時を回り、暗い空から、白い雪がリビングの窓明かりにうつすらと照らされて落ちてきている。

見る間に、その数が増えてきた。

「ほんとですね。結構、大粒で、たくさん降ってますね」

光彦が言う。

「今日は、寒かったもんな」

元太が光彦の後に立って言った。

「じゃ、そろそろプレゼント交換しよう！」

歩美がそう言って、集めたプレゼントを無作為に渡し、みんなに

回すように促した。

今日は、阿笠が3人を車で送って行くことにしている。多少、遅くなることは、それぞれの親に連絡をしてあったので、安心して騒げるためか、いつも以上に3人のテンションが高い。

コナンと哀にしてみれば、もう5年以上も彼らと付き合っていることになる。最近、驚くようなマセたことを言うようになってきたし、いろいろな知識も増えてきた。コナンと哀にとって、子供らしい成長を見せる彼らと過す時間は、次第に楽しく、かけがえのないものになってきていた。

途中、哀は、トイレに行こうと席を外した。

トイレから出て、リビングへ行くまでの廊下、大きな窓に映る自分の姿の向こうに雪が落ちてている。

それを見てみると、哀は、フト、あの日を思い出した。

5年前、杯戸シティホテル。雪が降り積もる中、ジンに撃たれたこと。ピスコに拳銃を向けられたこと。もう少して殺されるところだった自分を助けてくれた彼。

以前は、眠っているときの悪夢として、または恐怖と共に思い出していたこの事件も、今では、自分でも驚くほど冷静に、過去の思い出として心に映すことができる。無論、いい思い出であるわけではないが、あの日、彼が貸してくれたジャケットのぬくもりと、自分を背負う彼の背のぬくもりは、哀にとってかけがえのないものになっていた。

そして、その同じぬくもりが今、哀を包んでくれている幸せ。いろいろな想いがめぐり、哀は、足を止め、しばらく雪を見ていた。

「こんなところにいたのか」

突然、聴きなれた彼の声がした。あの日、自分を助けてくれた彼、暖かい背中の主が哀の後に立っているのが窓に映っている。

「どうかしたのか？遅かったから、様子を見に来ただけど…  
何か、考え込んでいるようだったけど？」

「ちよつとね…雪を見ると、どうしても、思い出しちゃうの。  
杯戸シテイホテル…もう、5年たったのね」

哀は、後に立っているコナンに振り向きもせずと言った。

「ああ。あの時は、必死だったな…正直、あの時、おめえのことを好きじゃなかったかもしれない。でも、死なせたくなかった…  
・何とかしてやるって、約束したばっかだったしな」

「今は？」

哀が少しすねたような声で訊いた。

「愛してるに決まってるんだろ」

哀は、窓に映るコナンをずっと見ていた。彼は今、照れたような顔をしているが、ガラスに映る姿では、顔が赤いのみではわからない。そして、コナンも、窓に映る哀を見ている。

哀は、スツと、倒れこむようにして体を後に傾け、コナンに体を預ける。その華奢な体を受け止めたコナンは、後からそつと、哀を抱きしめた。

自分と、自分を受け止めた彼を映す窓を見ながら、哀は、自分を

抱きしめる暖かい腕に、手をかけた。

自分と彼を移す窓の向こうには、白い雪が舞っている。

「哀・・・」

コナンが愛しげに名前を呟くと、哀を自分の方に向かせて、肩を抱いた。さっきまで、窓に映るお互いを見つめあっていた2人が、直接みつめあう。

哀の手がコナンの胸に当てられると、ふたりの唇が重なった。

「やったー!」

「バツチリ、撮れましたよ!」

「!」

突然、フラッシュが光り、声が出た。コナンと哀がハッとその方を向くと、歩美達が二人を見てニヤニヤしている。光彦はデジカメを手にしていた。

「光彦、見せてみるよ・・・おー、バツチシ撮れてんじゃん!」

元太がデジカメを覗き込んで言う。

「タイミング、バツチリでしたね。我ながら、うまく撮れました。お二人、大人っぽいですから、ホント、決まっていますよ。写真つて、モデルも良くないと、こうは綺麗に撮れません」

光彦が一人納得した表情でいると、歩美も横からその画像を覗いて、コナンと哀の方を見ると、

「うん!バツチリ、コナン君と哀のキスシーン・・・綺麗だね。まるで、映画のラブシーンみたい」

ピースサインを二人に向けながら言った。

「哀、携帯に送ってあげるね。コナン君にも・・・後、蘭さんや園子さんにもメールで送っておくかな？」

キスしたままの体制で固まっていたコナンと哀だが、ハッと我に返って、慌てて離れた。

「おい！おめえら！・・・その写真、消せ！」

コナンが光彦の方に行くと、三人はコナンから逃げておどけてみせ、

「だめー・・・博士、みんなに送るから、パソコン貸して」

そう言う歩美を追いかけようとするコナンを、元太が羽交い絞めにして阻止している。

「してやられたの、コナン君」

阿笠もニヤニヤして、歩美にパソコンを貸している。

元太に抑えられたコナンが哀の方を振り向くと、

「おい！おめえも止めるよ！」

と、言ったが、哀は、クスクス笑っているだけだった。

「こんなところで、不用意にキスする方も悪いわね」

他人事のように言ったので、コナンは、ため息をつき、肩をすくめるしかなかった。

「歩美ちゃんが、お二人がいなくなっただから、きつと、どこかでキスでもしてるんだらうって・・・当りでした」

光彦が笑って言う。

「で、後学のためにみんなで見学しようってな」  
元太がコナンの横腹を肘で小突きながらニヤニヤして言う。

「写真も押さえたし・・・コナン君と哀、当分、私達の言いなりね」  
博士にパソコンを借りて、写真をどこかへ送ったらしい歩美も意地悪い笑いを浮かべている。

「・・・おめえら・・・」

絶句しているコナンと深いため息をつく哀。

さすがのコナンと哀も、今回ばかりは、この年の離れた友人たちに完全にやられてしまった。

\*\*\*\*\*

その夜の雪は、見る見るうちに積もった。久しぶりの大雪に、さすがに阿笠も車を出すことができなくなり、全員、阿笠邸に泊まることになった。

コナンと光彦、元太は、2階の部屋で寝ることになり、歩美は、哀と一緒に彼女の部屋で寝ることにした。

「ごめんね、哀。ほんとに、コナン君と一緒に寝たかったですよ？」

歩美がニヤニヤしながら言う。

「そんなこと言うなら、私の部屋に入れてあげないわよ」

「ごめーん。哀さんの部屋に泊めてください」

手を合わせて歩美が言う。

「さあ、どうしようかしら？」

哀が意地悪気な表情で言う。

「哀のいじわる。さっきの写真、クラスの全員に送ってやるから。それから、プリントして、町中に張り出してやるんだから」

「降参。わかりました、私の部屋で寝てください、歩美さん」

哀は、頭を下げて頼むマネをして、歩美を上目で見る。そして、二人で笑い合った。

「コナン君。寝るんなら、わしの部屋でもいいがの」

阿笠は、一人で寝るのは寂しくなったのだろうか、コナンたちに言った。

「いや・・・三人も寝れねえだろ？2階の部屋、借りるよ」

コナンは阿笠に応えた後、光彦と元太に囁いた。

「博士と一緒にじゃ、イビキで寝られねえからな」

「そうですね」

「博士のイビキ、半端じゃねえもんな」

光彦と元太も頷いた。

\*\*\*\*\*

「ね、哀。来年は、中学生だね。私ね、哀と友達になれて、ホントによかったって思う。それに・・・哀さ、コナン君と付き合うようになったって、よく笑ってくれるようになったし、今ね、歩美、ホントに幸せなんだ。哀のお蔭だよ」

哀の部屋で、哀と並んで寝ている歩美が言った。

「そんなことないわ。私の方こそ、あなた達に感謝しているわ。私のような素直でも、可愛くもない女を仲間にしてくれたんだもの」

「うっん。哀は、十分に可愛いし、綺麗だし・・・私の自慢だよ、哀が友達だっていうの。コナン君と光彦君、元太君もね」  
「ありがとう、歩美」

「えへ・・・ねえ哀、中学に行っても、友達でいてくれるよね」  
「もちろんよ」  
「ところでさ」

歩美が上半身だけを起こして、哀の方へ向いて言う。

「哀とコナン君ってさ、いつもあんな風にキスしてるわけ？」  
「は？」

「だって、ホント、映画のシーンみたいだったから」  
「あなた達、どこから見てたの？」

哀は、少し慌てて訊いた。

「哀がコナン君にもたれ掛ったところから・・・」  
「そう」

哀は、その前の会話を聞かれていなかったことにホッとした。  
その反応に歩美は怪訝な表情をしていたが、

「何？・・・なんか聞かれたくない話でもしてたわけ？」  
「え？・・・あ、そんなことはないけど・・・」  
「そおかな？・・・ま、いいけど。哀とコナン君のヒソヒソ話って、今に始まったことじゃないもんね」

哀は、そう言われると、一言もなく、ため息をつくだけだった。

歩美には、わかっている。いや、感じているといった方がいいだ

ろう。コナンと哀から聞かされたわけではないが、二人が何か重いものを抱えていることを。

二人から感じる独特な空気。ただ、仲が良いとか、付き合っているとかが、そういうものだけではない、二人だけの関係。そこには、誰も入れないということも。

でも、自分は、二人の親友であることは間違いない。コナンも、哀も、自分や光彦、元太のためであれば、危険も顧みず、助けてくれるだろう。そして、それほど友人関係であつても、いや、友人であればこそ、二人には、二人だけにしか、わからないものがあるのだということが、よく理解できる。5年も傍にいて、付き合ってきたのだからこそ、それが感じられるのだ。

元々、二人が身にまとう雰囲気は、大人たちも一目置くような、自分たちと同じ小学生ではないと、感じさせるものだった。どこが違うといわれると、説明するのは難しいが、でも、明らかに違うものを持つ二人。そして、二人が最も信頼しているのは、周りの大人たちではなく、それはお互いのこと。コナンが最も信頼しているのは哀であり、哀が最も信頼しているのはコナン。

自分から見れば、何でも知っていて、何でも出来るようなコナンが、唯一、物事を尋ねたり、相談するのは、哀だけ。そして、いつも冷静で、博識な哀が、唯一、その瞳を揺らし、頼っているのは、コナンだけ。そこには、他の人間には見せない、お互いだけが見せる真の姿があるように思える。

二人の間にある絶対的な信頼関係は、お互いを理解していなければ生まれえない。二人の傍にいて、二人を見てきた歩美には、そのことが理屈ではなく、感覚でわかっていた。そして、その二人の姿を見

て、共に行動してきたことは、歩美自身をも、大きく成長させていた。

「哀、私ね、哀とコナン君が大好き。いつまでも仲良くね。仲の良い二人が大好きだから・・・」

歩美は、明るく哀に言う。

「ありがとう、歩美」

哀は、実際は10歳も年の違う親友に、心から感謝して言った。

\*\*\*\*\*

「でもよ。羨ましいよな。灰原って最近綺麗になっただし、前に比べたら、可愛くもなっただし・・・コナンって、いいよな」

三人分の布団を敷いた部屋で、パーティーの料理の残りをしつこく食べている元太が心底羨ましげに言った。

「そうですね。灰原さんって、3年生の時に長期入院してから、随分、表情が柔らかくなっただし、笑うことも多くなりましたしね。結構、他の男子でも、灰原さんが好きだっていう人、多いですよ」

光彦は、まだ食べている元太を半ば呆れて見ながら言った。

この二人は、以前から歩美に好意を持っていることは、コナンもよく知っていた。そして、勉強家で、同年代では博識の光彦が、さらに博識の哀に尊敬と思慕の念を抱いていることも。

光彦も感じている。コナンと哀には、普通の小学生とは違う何かがあることを。二人の間には、付き合うというようなレベルを超え

たものがあるということ。

言葉にしなくても通じる何かを持つ二人。お互いを信じている二人。そして、何か深い哀しみ、辛さのようなものを共有している二人。

3年生の時、コナンと哀が長期入院して半年も学校を休んだ後、コナンと哀の全快祝いとクリスマスパーティーを兼ね、阿笠邸にみんなが集まったことがあった。

少年探偵団と、東尾マリアなどクラスメートが数人、蘭と園子、佐藤刑事と高木刑事、大阪の服部平次と遠山和葉もやってきて、賑やかに過ぎた。光彦にとっても、楽しい思い出になっているこのパーティーだが、今でも、ドラマのシーンのように印象に残っている場面がある。

蘭が哀に声をかけ、二人でしばらく話しているとき、その様子をコナンが見つめているのに気づいた。コナンは、その時、フツと僅かな笑みを口元に浮かべた後、辛そうに俯いた。そして、そのことに気づいた哀がコナンに向けた、包み込むような優しい眼差し。

しばらくして、哀は、蘭から離れ、コナンの傍に行くと、母親のように、そっとコナンの頭に手を触れ、微笑んでみせた。その笑顔にコナンも微笑んでみせる。そして、コナンと哀は、園子や佐藤刑事と笑顔で話している蘭を優しく、それでも、どこか哀しげに見つめていた。

コナンと哀、蘭の間に何かがあるのか、それはわからない。でも、10歳も年上の蘭を気づかう二人の眼差しは、明らかに小学生のものではなかった。わかり合った二人にしかできない表情と、言葉な

き会話。この時、光彦は、二人の間には、自分の知らない何か、二人だけが共有している何かがあることを感じていた。

「コナン君、灰原さんのこと、大事にしてくださいよ」

「ああ？どうしたんだよ、急に」

「だって、灰原さんて、初めて会った頃は、どこか哀しそうで、辛そうで、寂しそうでしたけど、今は、よく笑っていますし、以前のような表情は、ほとんどしなくなりました。それって、コナン君と付き合ってからでしょ？だから、その笑顔を守っていつてほしいって思っんです。もう、寂しそうな彼女の顔、見たくありませんからね」

「光彦……」

コナンは、この真面目な、少し大人びた友人の、哀への想いを知っている。

「ああ。アイツは、もう大丈夫だよ。以前のアイツに戻ることはねえさ。そしてさ、それは、俺だけじゃなく、歩美や元太、光彦のお蔭でもあるんだぜ。おめえ達がアイツを友達、仲間とっていてくれる限り、アイツは、いつも笑ってくれるさ」

このコナンの言葉に、光彦は、やっぱりコナンには叶わないと思っただ。そして、哀がコナンを好きになっただ理由が、改めてわかったような気がした。

\*\*\*\*\*

光彦と元太が眠ったのを確認すると、コナンは、部屋を出て、1階のリビングに戻った。灯りを付け、キッチンへ行ってコーヒーを

入れる。切ってあった暖房を入れ、コーヒーを持ってソファに座った。

「眠れないの？」

コナンが声のする方に目をやると、哀が階段を降りてくる途中だった。

「ああ・・・おめえもか？」

「ええ。まあ、まだ11時前だもの」

「コーヒー飲むか？」

「ええ、頂くわ」

哀がソファの傍まで来る。

「待ってる」

コナンは、そういつてキッチンへ向かった。

コーヒーカップを前に、並んで座っている二人。とくに話をするわけでもなく、ただ、まだ降り続けている雪を眺めていた。

何分間、そうしていただろうか？ふと、コナンが口を開いた。

「あいつら、子供だと思ってたけど、随分、成長しているな」

「え？」

「光彦や元太たちだよ・・・さっき、光彦に言われたんだ。おめえを大事にしろって。もう、前みたい寂しい顔や辛そうな顔をさせるなって。アイツも、おめえのことが好きだかな。いろいろ、気づかってんだらう」

「そう・・・歩美も言ってたわ。あなたと仲良くしろって。私達、

彼らに随分心配されてるのね・・・フフ・・・どっちが子供なんだか・・・」

哀は、おかしそうに笑う。

最近は、こんな優しい、素直な笑顔をしてくれるようになった哀。この笑顔は、何より、コナンに安らぎをくれる。

「そだな」

コナンも笑う。

この笑顔は、哀の大好きな笑顔。哀に生きる希望をくれた、幸せをくれた大事な人の笑顔。

哀がコナンの肩に頭を預ける。そつと、コナンの手が哀の肩にまわされた。

「哀、笑っていてくれよな。俺の傍で・・・」

コナンが呟くように言った。

「あなたと居れば、笑っていられるわ・・・ただ、傍にいと、事件に巻き込まれるから、少し自重しようかとは、思うけどね」

コナンは、自分の肩にある哀の頭を起し、少し意地悪く笑うその顔を軽く睨む。

「可愛くねえな」

「あら、今頃わかったの？」

そう言っつて、見つめ合っつて笑う。

そして、目を閉じ、お互いの唇を近づけた時、コナンが目を開け、その動きを止めた。そして、当たりを見回す。

その気配に目を開けた哀が、怪訝な表情を浮かべて訊く。

「どうしたの？」

「アイツら、またカメラ持って、どっかから覗いてんじゃないかねえかと思ってる・・・」

そのコナンの言葉に、哀も当たりを見回す。

「大丈夫みてえだな」

二人で、顔を見合わせて、静かに笑った。そして、もう一度目を閉じ、今度は、そつと唇を合わせた。

(後書き)

なんと、季節はずれな話しなんだ！

投売りセールで買った「コナン」TVシリーズのビデオ、「黒の組織との再会」を観て、思いつきました。

例のごとく、一気に書いたので、自信はありません。

最後まで読んでくださった方に、感謝！です。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7216c/>

---

雪 ～コナン哀ものがたり・番外編3～

2009年7月1日21時17分発行